

運動部経験が想定される大学生における パーソナルスペースと対人恐怖心性の関係

土田 幸男・金谷 海久斗¹⁾

2022年1月6日受付 2022年2月6日受理

The relationship between personal space and
anthropophobic tendency in university students with
possible athletic club experience.

Yukio Tsuchida, Mikuto Kanaya

キーワード：パーソナルスペース，対人恐怖心性，体育大学，運動部活動，大学生

I. はじめに

1. パーソナルスペースとは

人は誰しも、パーソナルスペースという空間を持っている。パーソナルスペースとは、「生物の個人的空間」と呼ぶことができ、「生物が自身と他の生物との間に習慣的に置く距離」とされており¹⁾、人が必要だと感じているパーソナルスペースに望ましくない他者が侵入すると不快感や緊張感を生じるという²⁾。渋谷³⁾は、このパーソナルスペースを3つに分類している。1つ目は、「自我の拡大した空間」、2つ目は、「自己を庇護する空間」、そして3つめは「コミュニケーションの空間」である。

渋谷³⁾による、パーソナルスペースの3分

類はどのようなものであろうか。1つ目の「自我の拡大した空間」は、Sommer⁴⁾の考えを踏まえたものであり、「個人の空間は、侵入者が入れないように、その人の身体をとり囲む見えない境界を持った領域を意味する」と定義されている。個人的空間への侵入は、人間の自我領域への侵犯であり、個人的空間の境界内に立ち入られると、不快感を感じるとされている。また、「個人の空間は、必ずしも球形ではないし、各方向に等しく広がっているわけでもない」とされており、「相手が未知の人であれば、友人である場合と違って、個人的空間を失うことが重大問題となる」という。2つ目の「自己を庇護する空間」は、Dosey & Meisels⁵⁾の考えを踏まえ、パーソナルスペース

大阪体育大学教育学部
〒590-0496 大阪府泉南郡熊取町朝代台1-1
1) 和歌山県立紀伊コスモス支援学校

スは身体を傷つける恐れから自己を守り、自尊心を庇護するために使われるものとされている。3つめの「コミュニケーションの空間」については、「このパーソナルスペースは、特に対人場面において、相互の関係に最も相応しいように、その都度設定されるものであり、二人の間の相互の認知によって変化する³⁾」という性質を持つと考えられている。

以上の3つのパーソナルスペースの定義のうち、本研究では2つ目の「自己を庇護する空間」の視点からパーソナルスペースを捉える。「自己を庇護する空間」は庇護の目的のために利用される身体緩衝帯であり、知覚された恐れが大きいほど、パーソナルスペースは大きくなると考えられる⁵⁾。このことは、パーソナルスペースは性格特性等によって変化する可能性を示唆している。

2. 対人恐怖心性

「社会的交流において、自己の外見や動作が他者に対して不適切または不快であるという思考、感情、または確信によって対人状況についての不安および回避が特徴である」対人恐怖症は、DSM-5 (Diagnostic and statistical manual of mental disorders, the 5th edition) においては日本に特有の文化症候群とされている⁶⁾。対人恐怖症の特徴としては、対人場面において耐え難い不安・緊張を抱くために、人と関わることを恐れ、人の視線を気にする、人前でひどく緊張する、赤面、震え、腹痛や

下痢、どもる、動悸、息切れといった症状が見られるとされている⁷⁾。こうした対人恐怖症的特徴は一般青年においても多く見られる。広く一般の人々に見られる対人恐怖の傾向を表す概念として、対人恐怖心性 (anthropophobic tendency) が提唱されている⁸⁾。対人恐怖心性の自覚について文化的自己観という概念から検証した谷の研究⁹⁾では、欧米に比べ日本やアジアは相互協調的な自己観であるため、他者との関係が自己を定義し、「関係」の中での自己の側面と、「個」としての自己の側面をめぐる葛藤をもたらす可能性が指摘されている。谷はこのことから、相互協調的自己観が強い日本やアジアでは、「関係」に対する過剰な配慮が対人恐怖心性を引き起こす可能性があることを指摘している。

3. パーソナルスペースと性格特性の関係

パーソナルスペースの大きさは性格特性と関連があることが想定されている。渋谷³⁾は、不安傾向の高い人は対人場面でも不安を強く感じる傾向があり、その不安を相手に知られたくない、あるいはその不安を増大させたくないという思いが、パーソナルスペースを大きくしている可能性があるとしている。児玉・進藤¹⁰⁾の研究では、不安特性が高い者の方が低い者よりもパーソナルスペースが大きいことが報告されている。また、杉本¹¹⁾は、対人恐怖心性がパーソナルスペースに一定の影響を与え、対人恐怖心性が高い者は相手との接

触を回避しようとしている傾向が見られたことを報告している。パーソナルスペースの大きさは性格特性の中でも特に、不安に関連する対人恐怖心性との関係があることが考えられる。

性格特性は、大学や大学の各学部のような特定の集団においても一定の傾向が見られることが報告されている。例えば、体育系大学教育学部の学生は、他の大学の学部生と比べて外向性や協調性が特に高いことが報告されており¹²⁾、こうした学生の背景としてこれまでに運動部活動の経験を有していることが報告されている¹³⁾。こうした特異的な性格傾向を持つ集団では、パーソナルスペースの在り方についても何らかの特徴があるのであろうか。本研究では、パーソナルスペースの大きさに影響を与えると考えられる対人恐怖心性尺度が、過去の運動部経験が想定される体育系大学教育学部生においても先行研究同様の因子構造を示すかを検討した。そして、対人恐怖心性尺度とパーソナルスペースの関係にどのような特徴が見られるかを検討した。パーソナルスペースは各方向と、対人場面の違いを想定して測定し、対人恐怖心性との関連を検討した。

II. 方法

1. 参加者

体育系大学教育学部の学生83名のうち、回

答に不備のあった1名と、重複データと考えられる不自然に回答が全く同じものとなっていた女性8名を除く74名(平均年齢:20.23歳, $SD = 1.56$, 男性40名, 女性34名)を対象とした。個人情報に連結不可能匿名化し、個人が特定できないように配慮した。一部の分析では、対人恐怖心性尺度の平均より上位を高群、下位を低群として扱った。

2. 対人恐怖心性尺度¹⁴⁾

全30項目、「全然あてはまらない」から「非常にあてはまる」の7件法で構成した。先行研究での下位尺度は、「I 自分や他人が気になる悩み」、「II 集団に溶け込めない悩み」、「III 社会的場面で当惑する悩み」、「IV 目が気になる悩み」、「V 自分を統制できない悩み」、そして「VI 生きることに疲れている悩み」の6つであった。本研究では1点から7点の範囲で、得点が高いほど対人恐怖心性が高くなるように採点した。

3. パーソナルスペース調査紙

児玉、進藤¹⁰⁾と斉藤¹⁵⁾が作成したパーソナルスペースの調査紙を参考にし、独自にパーソナルスペース調査紙を作成した。図1にパーソナルスペース質問紙の例を示す。前・右横・後・左横の4方向をそれぞれ0~3mの間で0.5m刻みに、各対人場面におけるパーソナルスペースの大きさの評価を求めた。対人場面は、「親しい同性」「親しい異性」「親しくない同

1. 対人相手が親しい同性の場合(それなりに付き合いのある, クラスメイト等空間を共有する人物) (単位: m)

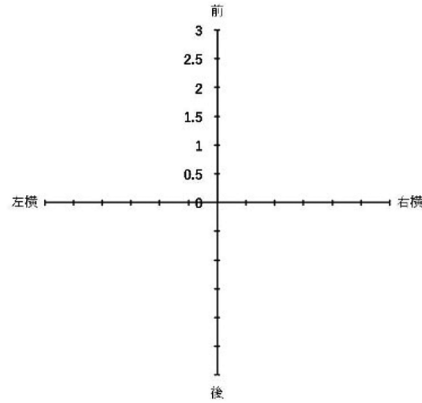


図1 パーソナルスペース質問紙の例

性]「親しくない異性」の4場面とした。各対人場面の目安として、「親しい」を「それなりに付き合いのある, クラスメイト等空間を共有する人物」とし, 「親しくない」を「普段挨拶を交わさない程度の顔見知り」と設定した。

4. 手続き

調査に対する説明を行ったうえで, 参加を希望する者に対して, オンラインで回答を求めた。調査では, 一連の質問紙に対して回答を求めた。なお, 調査では「ふれあい恐怖心性」に関する質問紙も実施したが, 本研究では分析には用いなかった。

5. 分析方法

対人恐怖心性尺度に対して, 因子分析(主因子法, プロマックス回転)の実施, および

Cronbachの α 係数を算出した。対人恐怖心性の性差の検討および高・低群のパーソナルスペースの違いの検討においては, t 検定を行った。対人恐怖心性尺度とパーソナルスペース調査紙得点に対して, ピアソンの相関分析を実施した。

Ⅲ. 結果

1. 対人恐怖心性尺度

対人恐怖尺度の各下位尺度における基礎統計量と, 信頼係数を表1に示す。対人恐怖心性尺度においては十分な α 係数が得られた。続いて因子分析を行った(表2)。スクリープロットを参考に因子を抽出した結果, 3因子構造が見出された。これは, 先行研究¹⁴⁾と異なる因子構造であった。第1因子は, 主に「Ⅱ

集団に溶け込めない悩み」と「Ⅲ社会的場面に当惑する悩み」が含まれており、また、「Ⅴ自分を統制できない悩み」の中から3項目が含まれていた。これらからは自分への自信のなさが見いだせるため、「自己否定感が高い悩み」とした。第2因子は、「Ⅰ自分や他人が気

になる悩み」と「Ⅵ生きることに疲れている悩み」の項目が主だったため、「生活での疲労感」とした。そして、第3因子は、ほとんどが原尺度の「Ⅳ目が気になる悩み」の項目で占められていたため、そのまま因子名を採用し、「目が気になる悩み」とした。

表1 対人恐怖心性尺度の基礎統計量とα係数

	M (SD)	α 係数
対人恐怖心性尺度	85.88 (26.40)	.93
自己否定感が高い悩み	35.34 (12.38)	.89
生活での疲労感	35.23 (12.46)	.89
目が気になる悩み	15.31 (6.24)	.84

表2 対人恐怖心性尺度に関する因子分析

	I	II	III
15.人がたくさんいるところでは気恥ずかしくて話せない	.75	-.10	.17
2.集団の中に溶け込めない	.72	-.03	-.09
21.大ぜいの人のなかで向かい合って話すのが苦手である	.66	-.18	.25
26.人が大ぜいいると、うまく会話の中に入っていけない	.64	-.06	.23
3.人前に出るとおどおどしてしまう	.58	-.04	.21
11.根気がなく、何ごととも長続きしない	.57	.18	-.01
9.会議などの発言が困難である	.56	-.15	.17
27.引っ込みじあんである	.54	.18	.03
8.グループでの付き合いが苦手である	.54	.09	.14
5.ひとつのことに集中できない	.52	.28	-.31
14.仲間のなかに溶けこめない	.38	.30	.02
23.意志が弱い	.37	-.06	.30
30.何をやってもうまくいかない	.07	.82	-.21
18.いつも疲れているような感じがする	-.27	.73	.04
12.充実して生きている感じがしない	.15	.66	-.05
20.人との交際が苦手である	.35	.60	-.20
6.生きていることに価値を見出せない	-.02	.58	.13
19.自分のことが他の人に知られるのではないかとよく気にする	-.08	.55	.36
13.自分が相手の人に忤な感じを与えているように思ってしまう	-.10	.48	.40
25.人と会うとき、自分の顔つきが気になる	-.02	.48	.42
24.いつも頭が重い	-.15	.45	.30
17.計画を立てても実行がともなわない	.33	.43	-.26
7.自分が人にどう見られているのかわからず考えてしまう	.05	.43	.39
1.他人が自分をどのように思っているのかとても不安になる	.06	.42	.31
28.向かい合って仕事をしているとき、相手に顔を見られるのがつらい	-.02	.03	.74
4.人と目を合わせていられない	.10	-.13	.67
10.人の目を見るのがとてもつらい	.21	-.13	.67
29.すぐに気持ちが悪く感じる	-.06	.19	.60
16.人と話をするとき、目をどこにもついてもついでいいかわからない	.10	-.04	.58
22.顔をジッとみられるのがつらい	.14	.07	.49
因子間相関	I	II	III
I	—	.44	.51
II	.44	—	.46
III	.51	.46	—

2. 性別ごとの対人恐怖心性の高低とパーソナルスペースの関係

性別による、対人恐怖心性尺度の得点を t 検定によって比較したところ、女性の方が男性よりも得点が高かった ($t(72) = -2.47, p = .02$)。対人恐怖心性尺度に男女の性差による得点の違いが認められたことから、パーソナルスペースとの関連性に関しては男女で異なることが考えられたため、男女別に対人恐怖心性尺度の総得点と各対人場面4方向ずつにおけるパーソナルスペースの大きさの相関分

析を行った。表3に相関分析の結果を示す。男性は、対人恐怖心性尺度の総得点とパーソナルスペースの大きさに、いくつかの弱い正の相関が見られたが、統計的に有意ではなかった。一方、女性では弱い負の相関または中程度の負の相関が見られ、一部の相関は統計的に有意であった。女性では対人恐怖心性が高い者ほど、パーソナルスペースが小さい傾向が見られ、特に親しい異性の場合に強く見られた。

表3 性別ごとの対人恐怖心性尺度とパーソナルスペースの相関係数

	対人恐怖心性尺度	
	男性 (n=40)	女性 (n=34)
対人相手が親しい同性の場合		
前	.21	-.10
右横	.12	-.13
後	.19	-.09
左横	.12	-.13
対人相手が親しい異性の場合		
前	.24	-.30
右横	.20	-.35 *
後	.22	-.31
左横	.28	-.35 *
対人相手が親しくない同性の場合		
前	.06	-.24
右横	.02	-.16
後	.07	-.19
左横	.01	-.16
対人相手が親しくない異性の場合		
前	.06	-.15
右横	.03	-.16
後	.07	-.16
左横	.02	-.16

* $p < .05$

表4 性別ごとの対人恐怖心性高・低群におけるパーソナルスペースの平均値(単位 m)

	男性低群 (n = 25)		男性高群 (n = 15)		女性低群 (n = 12)		女性高群 (n = 22)	
	M	(SD)	M	(SD)	M	(SD)	M	(SD)
対人相手が親しい同性の場合								
前	0.72	(0.46)	1.00	(0.68)	0.83	(0.65)	0.64	(0.56)
右横	0.60	(0.48)	0.77	(0.73)	0.58	(0.73)	0.46	(0.62)
後	0.68	(0.45)	0.93	(0.73)	0.75	(0.75)	0.52	(0.61)
左横	0.60	(0.48)	0.77	(0.73)	0.58	(0.73)	0.46	(0.62)
対人相手が親しい異性の場合								
前	0.82	(0.52)	1.07	(0.59)	1.38	(0.53)	0.93	(0.47)
右横	0.70	(0.58)	0.93	(0.56)	1.08	(0.63)	0.64	(0.52)
後	0.84	(0.67)	1.07	(0.59)	1.29	(0.69)	0.75	(0.46)
左横	0.72	(0.60)	1.00	(0.63)	1.08	(0.63)	0.64	(0.52)
対人相手が親しくない同性の場合								
前	1.46	(0.68)	1.53	(0.69)	1.63	(0.88)	1.27	(0.59)
右横	1.40	(0.72)	1.40	(0.69)	1.50	(0.83)	1.23	(0.67)
後	1.44	(0.70)	1.53	(0.69)	1.58	(0.93)	1.23	(0.65)
左横	1.42	(0.70)	1.40	(0.69)	1.50	(0.83)	1.23	(0.67)
対人相手が親しくない異性の場合								
前	1.54	(0.82)	1.60	(0.85)	1.88	(0.86)	1.57	(0.81)
右横	1.48	(0.86)	1.50	(0.89)	1.88	(0.86)	1.55	(0.80)
後	1.52	(0.84)	1.60	(0.85)	1.88	(0.86)	1.55	(0.80)
左横	1.50	(0.84)	1.50	(0.89)	1.88	(0.86)	1.55	(0.80)

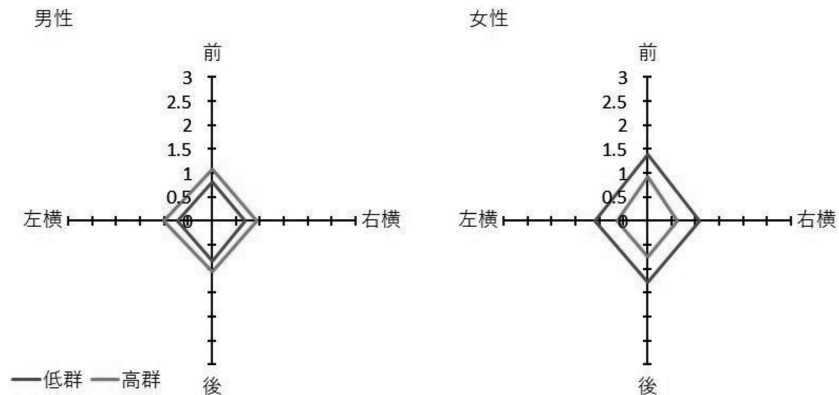


図2 「対人相手が親しい異性の場合」における対人恐怖心性高・低群(男女別)のパーソナルスペース

男女別に、対人恐怖心性尺度の平均値を基準として、高群と低群に分類した。群の平均値と人数分布を表4に示す。男女別に高・低群でパーソナルスペースの違いがあるかどうか、 t 検定を行った。男性では高・低群でパーソナルスペースの大きさに統計的に有意な違いは見られなかった。一方、女性では「対人相手が親しい異性の場合」において、対人恐怖心性高群の方が低群よりも前、右横、後、そして左横におけるいずれのパーソナルスペースにおいても小さかった（それぞれ、 $t(32) = 2.52$, $p = .02$; $t(32) = 2.23$, $p = .03$; $t(32) = 2.76$, $p = .01$; $t(32) = 2.23$, $p = .03$ ）。図2に「対人相手が親しい異性の場合」における対人恐怖心性高・低群（男女別）を示す。

IV. 考察

1. 体育系大学教育学部生における対人恐怖心性

本研究では、パーソナルスペースの大きさに影響を与えようと考えられる、対人恐怖心性尺度が過去の運動部活動が想定される体育系大学教育学部生においても先行研究同様の因子構造を示すかを検討した。対人恐怖心性尺度は先行研究¹⁴⁾の因子構造とは異なる3因子構造を示した。このことは、体育系大学教育学部生の対人場面の捉え方は先行研究とは異なる可能性を示唆している。

中林・深町¹⁶⁾の報告している体育専修生の

男子学生は、「抑うつはなく、協調性があり、のんきで、支配性があり、社会的外交の傾向を示している」とされており、女子学生は、「抑うつはなく、神経質でなく、活動性があり、のんきで、試行的外交で、支配性があり、社会的外交の傾向を示している」とされていた。土田¹²⁾の報告においても、体育系大学の教育学部生の特徴として、協調性や外向性の高さが指摘されている。本研究の参加者にもこうした特徴があると考えられ、先行研究とのパーソナルスペースの違いにつながった可能性が考えられる。体育系大学教育学部の学生は過去に運動部活動の経験が想定され¹³⁾、協調性や外向性が高く、また体育系大学という環境もまた協調することや外向性が求められといえる。こうしたことから、本研究の対人恐怖心性尺度の第1因子は社会や集団への参加に自信のなさが表れ、第2因子は、周囲と自身の違い等が気になり、精神的疲労感を感じるといった分類のされ方となり、第3因子と合わせて3因子構造になったと考えられる。

2. 体育系大学教育学部女子学生のパーソナルスペースの結果が意味する可能性

本研究では、対人恐怖心性尺度とパーソナルスペースの関係にどのような特徴が見られるかを検討した。本研究のパーソナルスペースの測定結果は、児玉・進藤¹⁰⁾の特性不安がパーソナルスペースに及ぼす影響を検討した結果と単純に比較すると、全体的にかなりパー

パーソナルスペースが小さかった。また、対人恐怖心性尺度に男女の性差による得点の違いが認められたことから、パーソナルスペースとの関連性に関しては男女別で検討を行った。その結果、男性では対人恐怖心性が高い者ほどパーソナルスペースが大きいという正の相関が見られたが、統計的に有意ではなかった。統計的に有意ではないものの、先行研究から考えられる不安や対人恐怖心性の高さがパーソナルスペースを大きくするという考えと同傾向の結果となった。一方、女性では対人恐怖心性が高い者ほど、パーソナルスペースが小さく、特に親しい異性の場合に明らかであった。このことは、男女別の対人恐怖心性の高・低群の分析でも示された。本研究の女子学生における対人恐怖心性とパーソナルスペースの関係は、先行研究とは異なるものとなった。すなわち、渋谷³⁾によって「不安傾向の高い人は対人場面でも不安を強く感じる傾向があり、その不安を相手に知られたくない、あるいは、その不安をさらに増大させたくないという思いがパーソナルスペースを大きくしている可能性がある。」と述べられている事や、児玉・進藤¹⁰⁾の研究より、特性不安の高い者の方がパーソナルスペースを広くとるといった結果、杉本¹¹⁾によって、対人恐怖心性が一定の影響を与え、相手との接触を回避しようとしている傾向にあることが示されたこととは異なるものとなった。このことは、本研究女子学生本人の対人意識と実際の人との距離

感が矛盾している可能性を示唆している。

本研究女子学生のパーソナルスペースの結果は何を意味するのであろうか。1つの可能性は、体育系大学という周囲の者の外向性と協調性が非常に高い環境であるため¹²⁾、本研究の女子学生は自身の本来のパーソナルスペースを適切に表現できなかった可能性が考えられる。もう1つの可能性は、セクシュアル・ハラスメント（以下、セクハラ）に対する意識の低さが存在している可能性がある。熊安¹⁷⁾によれば、高校での運動クラブ経験のある学生、そして体育・スポーツ系学部に所属する学生は、その他の学生よりもセクハラに対する認識が甘いことが指摘されている。さらに熊安¹⁷⁾は、男性よりも女性の方が、中高年層よりも若年層の方がセクハラに対して許容的であるという報告もしている。これらことは、女性や若年の選手たちは、セクハラの行為に対して自らの認識を鈍化させ、権力への追従・諦観により、スポーツ環境に生存する戦略を選んでいるとも解釈できるといふ高峰¹⁸⁾の指摘と強く関連している。すなわち、女性競技者は指導環境での性差別的な言動を黙認し、自らの感覚を鈍化させている¹⁹⁾という可能性が考えられるのである。本研究の女子学生も運動部活動の経験が想定されており、本研究の女子学生におけるパーソナルスペースの問題は、こうしたセクハラの行為に対する認識の鈍化を反映している可能性もまた考えられるだろう。対人場面に不安のあ

る対人恐怖心性が高い女子学生は、指導者との意思の疎通がうまくいかず、スポーツという文化の中で、人との関わりの過程において、自身の嫌悪感を伝えられず、自身の感覚を鈍化させ、自身にとっての適切なパーソナルスペースが曖昧になっているのかもしれない。これらについては、本研究で明確に証明されたものではないため、今後の更なる検討が必要である。

引用文献

- 1) Sommer, R. : Studies in Personal Space. Sociometry, 22 : 247-260, 1959.
- 2) 渋谷昌三 : パーソナル・スペースの形態に関する一考察. 山梨医科大学紀要, 2:41-49, 1985.
- 3) 渋谷昌三 : 人と人との快適距離. NHKブックス, 東京 (1990).
- 4) Sommer, R. : Personal space: The behavioral basis of design. Prentice-Hall, (1969). (穂山貞登 (訳) : 「人間の空間 : デザインの行動的研究」鹿島出版会, 東京 (1972).)
- 5) Dosey, M. A. , Meisels, M. : Personal space and self-protection. Journal of Personality and Social Psychology, 11 : 93-97, 1969.
- 6) American Psychiatric Association: Diagnostic and statistical manual of mental disorders, the 5th edition: DSM-5. American Psychiatric Publishing, Washington, DC (2013). (日本精神神経学会 (監修), 高橋三郎・大野裕・染矢俊幸・神庭重信・尾崎紀夫・三村将・村井俊哉 (訳) : 「DSM-5 : 精神疾患の診断・統計マニュアル」. 医学書院, 東京 (2014).)
- 7) 米倉志穂, 吉岡和子 : 女子青年の化粧行動と対人恐怖心性の関連. 福岡県立大学人間社会学部紀要, 21 (1) : 115-125, 2012.
- 8) 堀井俊章 : 大学生における対人恐怖心性の時代的推移. 横浜国立大学教育人間科学部紀要 I (教育科学), 13 : 149-156, 2011.
- 9) 谷冬彦 : 青年期における自我同一性と対人恐怖の心性. Japanese Journal of Educational Psychology, 45 : 254-262, 1997.
- 10) 児玉昌久, 進藤由美 : パーソナル・スペースに及ぼす特性不安の影響. 人間科学研究, 8 (1) : 15-24, 1995.
- 11) 杉本四利 : 対人恐怖心性が個人空間の諸側面に及ぼす影響についての研究—個人空間の投影法的測定を通して—. 九州大学心理学研究, 1 : 67-78, 2000.
- 12) 土田幸男 : 大阪体育大学における教育学部学生の性格特性について. 大阪体育大学教育学研究, 5 : 27-34, 2021.
- 13) 上月敏子 : 学生の生活実態と読書活動に関する一考察. 大阪体育大学教育学研究, 2 : 47-71, 2018.
- 14) 堀井俊章, 小川捷之 : 対人恐怖心性尺度の作成 (続報). 上智大学心理学年報, 21 : 43-51, 1997.
- 15) 齋藤ひとみ : コミュニケーション能力とパーソナル・スペースの関連性. 愛知教育大学研究報告 教育科学編, 60 : 197-203, 2011.
- 16) 中林忠輔, 深町明夫 : Y-G 性格検査による

本学の体育専修生の性格特性に関する一考察. 文教大学教育学部紀要, 24: 45-54, 1990.

- 17) 熊安貴美江: 日本のスポーツ界におけるセクシュアル・ハラスメントの実態と防止のための課題. 女性学研究, 26: 67-82, 2019.
- 18) 高峰修: ハラスメントの受容 なぜスポーツの場でハラスメントが起こるのか?. 現代思想, 41(15): 157-165, 2013.
- 19) 熊安貴美江: ハラスメント・暴力・スポーツ—セクシュアル・ハラスメントの可視化がめざすもの—. 現代スポーツ評論, 33: 60-72, 2015.